

大蔵省に入る

私は昭和十一年四月、一橋卒業と同時に大蔵省に入った。私は早くから将来の進路を官界、とりわけ大蔵省ときめていたわけではない。心のどこかに「住友」に魅力を感じ、できれば住友に入りたいという希望をもっていた。それというのも、子供のころから、住友鉱山の四阪島製錬所の煙を見ながら学校へ通っていたし、住友財閥の発祥の地、別子銅山には、郷里の村からもたくさんの人が働きに行っていた。私が涉獵したキリスト教関係の本の多くが、矢内原、黒崎、江原の各先生のもので、そのいずれもが住友と縁のある方々であった。また当時私は、川田順氏の和歌や随筆（とくに歴史物）が好きで、川田さんの二十数冊に及ぶ著書はほとんど読んでいた。その川田さんが住友の理事をしていたし、住友のことをよく書いておられたことなども、心理的に影響していたのかもしれない。

しかし、大学三年のとき、高文の行政科試験に合格したので、どうしたものかと迷いが生じ、十月頃であったと思うが、時の大蔵次官で同郷の先輩でもある故津島寿一氏のとこ

るへ相談に行った。すると津島さんは、即座に「君、大蔵省にこい」といわれるのだった。あまりにも突然のことで、面くらった私が「こいといわれますが、採ってくれるでしょうか」と申し上げると、「本日ただいま、ここで採用してやる。ほかを受けないでよろしい」とまで断言されるのであった。だから私の大蔵省採用は、もうこの時に内定していた。

ところが、翌十一年の二月二十六日には、いわゆる「二・二六事件」が起きた。高橋是清蔵相は官邸で銃殺され、津島次官も大臣に殉じて退官されることになった。私の採用を約束してくれた本人が辞められるというわけなので、私は大蔵省へ行って津島さんに会い、「あなたは今度お辞めになるそうですが、私の方は大丈夫でしょうか」とお訊ねすると、「何を馬鹿なことをいってるんだ。ちゃんと卒業できるように勉強しておけ」と、逆に叱られる始末だった。

そんなこんなのいきさつがあつて、大蔵省に入省してみると、高橋是清大臣の後任には、勳銀の馬場鉄一氏、次官には川越丈雄氏が起用されていた。このコンビは、主税局長に抜てきされた山田竜雄氏を加えて、明らかに大蔵省に新しい勢力を形成し、財政政策にも軍

国色が濃くなることであろうと一般に見られていた。高橋さんは元来自由主義者で、財政政策の軍国主義的傾斜には強い抵抗を続けてきた人であり、そのためにこそ、凶刃に倒れた人であるというのが大方の定説であった。大蔵省の主流を形成していた津島次官と賀屋主計局長、石渡主税局長、青木理財局長などは、いずれも自由主義的、合理主義的な伝承を担う人とされていた。それがあらぬか、馬場体制の登場とともに、これらの人々は退官、もしくは閑職に移ることになった。

入省とともに、私は預金部に配属され、官房の財政経済調査課兼務を命ぜられた。最初半年ぐらいいは、ナチス政権のいろいろな政策の翻訳などをやらされていたが、私の分担は資源政策であった。預金部では、これからの預金部の在り方を勉強させられて、レポートを出したりしていた。同期生は、東大からきた宮川新一郎、若槻克彦、山下武利、磯田好祐、福田久男、中平栄利、藤原正久（以上法学部）、篠川正次、小林英二（以上経済学部）の諸君、それに私を加えての十人であった。もつともその後、日銀から沢田悌（後の公取委員長）、興銀から小川潤一の両君がきて、われわれの仲間に加わった。その中で宮川、若槻、藤原の三君はすでに物故されているので、残された九人は、若槻、宮川両君の未亡人

を加えて、いまも毎月一回集まって、同期生としての旧交を温めあっている。初登庁の日の昼、同期生は食事を共にした。私は「お互いにこれから、中国式に悪口をいわずほめ合うことにしよう。そのうちにこの中のだれかが偉くなる（例えば満鉄総裁）。そうなるとお互いに食客になることもできようものだ」などといったことを覚えている。事実その後、われわれはまことに仲よくつき合っている。

そのころ、大蔵省では、見習が中心になって各局対抗の野球会のほか、読書会もやっていた。ケインズの「貨幣論」、ワグマンの「景気変動論」、ヒルファーディングの「金融資本論」などの輪読を、熱心にやったものである。軍国主義的な緊張が高まる中で、若い官僚の卵たちも、日本の政治の中にあつて、自分たちの役割はどうあるべきかについて、模索と苦悶を始めていた。仲間には、われわれの同期生のほかに、少し先輩の橋本竜伍（後の厚相）、石原周夫（経済協力基金総裁）、石野信一（太陽神戸銀行頭取）、黒金泰美（元官房長官）等の諸君がいた。下村治（評論家）、原純夫（前東銀会長）の両君は、当時それぞれニューヨークとロンドンに駐在していた。

また、われわれ仲間は、夏になれば鎌倉の浜に魚屋の二階を借りうけ、泊まり込みで水

泳をやったり、マージャン卓を囲んだりして、青春をエンジョイした。私の一期後には村山達雄（蔵相）、佐藤一郎（元企画庁長官）の両君をはじめ、多彩な人材を擁する十二年組が加わって、われわれの交友の輪は、いよいよ広がりを見ることになった。

大蔵省の食堂には、「雪」と「松」という二種類の定食があり、一方は三十銭、他方は十銭であった。高等官は、当然「雪」を食べていたようであるが、見習は通常「松」で辛抱していた。しかし、その見習が「雪」をとるようになると、そろそろ婚期が近づいたものと受けとられていた。

当時の大蔵省は、今の三井生命がある大手町にあり、震災後のバラック建てのままであった。広い敷地の中に、平将門の墓があった。幸いそれはその後、周辺の銀行や会社の配慮で、立派に保存されているが、当時はとくに顧みる向きもなく、省内でも、この墓の所在を知っている人は少なかったようである。

税界の修業

昭和十二年四月十五日、私は志げ子と結婚した。平凡な見合い結婚であった。岳父の鈴木三樹之助は、岩手県南の薄衣の出身で、生家は、現在もその地で醤油製造業を営んでいる。岳父は東京に出て米穀取引所の取引員、後に証券業も兼営した生粋の商人であった。終始和服で通し、旅行と俳句を友として、質実で清雅な生涯を生き抜いた人である。

結婚後、新居を杉並区和田本町に構えたが、落ち着く間もなく、七月一日には司税官に任ぜられ、横浜税務署長を命ぜられた。横浜では、磯子区の芦名橋に手こるな借家を借りつけた。浜から一町ほど離れたところで、どこか磯の香りのする閑静な住居だった。翌春には長男の正樹が生まれた。

当時の横浜は、関東大震災の傷からまだ癒え切っていないかった。外国貿易の主導権は、次第に日本橋や丸の内に乗われ、主体性を失った中継貿易港に転落しつつあった。横浜といえば、いつでも名古屋と神戸が引き合いに出されるが、その当時の横浜は、経済的にはこの両都市のはるか後塵を拝していたことが、税務署の窓からみても明らかであった。た

だ、浜ッ子という共通の意地と誇りが、市民の間に脈々と残っていた。またアメリカ人、中国人をはじめインド人、欧州人などが多く住み、関内には、エキゾチックな雰囲気がついていた。英国の総領事館では、時おり礼装によるパーティが開かれ、私なども何度か招待をうけたものである。

ところが、その年の七月七日には日中事変が勃発した。役所の同僚も続々と召集され、中には不幸戦死するものも出て、歴史のけわしい雲行きは、漸くその暗い影を私の周辺にも落しかけていた。

横浜での生活が、かれこれ一年たった十三年六月、私は仙台税務監督局の間税部長に任命された。仙台に向けて赴任するその日は、折悪しく京浜地帯一面は、台風による豪雨と洪水に見舞われ、東京・横浜間の交通が途絶していた。決められた日までに着任しなければならぬので、私はやむなく、パンツ一枚になって、トランクを頭におしただき、雲助のような格好で六郷の川を渡った。おかげでそのとき、尻にバイ菌でも入ったのか、仙台上に着任後まもなく、痔疾で入院するような羽目になった。

仙台は「杜の都」の名に相応しく、清潔で静かな街であった。東北人らしく、重厚で誠

実な人柄が多く、人情もこまやかで、住心地のよいところであった。税界にもすぐれた人材が豊富にいた。東北は、米どころではあるが、寒くて貧しいところである。土地は広いが、人口は少ない。「とうふ屋に三里、酒屋に五里」というところも珍しくはない。そこで、自然各地に「ドロブロク」(濁酒)の密造が盛んで、当時、仙台税務監督局間税部の定員三百人のうち半数は、もっぱらその取り締まりに当たっていたほどである。

米飯に麴こうじを加えて水にとかせば、簡単にドロブロクが出来上がる。酒は高いし、酒屋も遠い。それに冬はめつきり寒い。ドロブロクを飲めば満腹感は覚えるし、体も温まる。密造者にしてみれば、自分の米と麴で造るのだから、別に責められる筋合いではない、という意識もあつたらう。ただ、酒税法第一条には「本法ニオイテ酒類トハ、アルコール分一度以上ヲ含ム飲料ヲイウ」という規定がある。だからドロブロクといえども、課税を免れることができない仕組みになっている。こうして、農民と権力との不幸な接点が生れてくる。

たしかに東北では、いちがいにドロブロクの密造を責めるわけにはいかない事情があるにはある。しかし、ドロブロクの密造地帯には、統計上犯罪が多いし、村々の財政事情も決してよくない。その意味でも、この悪弊はできれば矯正されねばならぬものである。そこで

大蔵省としては、岩手県と秋田県を中心に「酒類密造矯正会」という啓蒙組織をつくり、密造の矯正に乗り出すことになった。この会は知事を会長に、検事正、地方裁判所長、税務監督局長を顧問に、学務部長、警察部長、次席検事、部長判事、間税部長をそれぞれ幹事とする構成で、地方の有識者を招き、その意見をききながら、啓蒙と取り締まりの対策を進めることになっていた。これがどこまで効果があるかはわからなかったが、私は職掌がら、この矯正会の仕事に熱心に取り組んだものである。

税務署の密造監視班は、未明から起きて、その摘発にとりかかるのが常であつた。そして、ようやく東の空が明るくなるころ、ドブロクの入ったカメが発見され、ただちに調査がとられ即決の処分が行われる。若者は働かねばならないので、たいてい老人がその責任をとるようになっていた。時折、その現場に立ち合つた私は、「権力」と「民草」、「治者」と「被治者」の悲しいかわりあいについて、何かしら割り切れない、やりばのない気持ちに沈んだものである。